

第2章 『オリヴァー・トゥイスト』

逃走と追跡——法と正義という名の暴力

松岡 光治



「葬儀屋の先輩ノアを床の上に殴り倒すオリヴァー」（第6章、ジェイムズ・マホニーの挿絵、ハウスホールド版）

「弱い者イジメの臆病者」というノアの実像が暴かれる。

第一節 孤独からの逃走

ディケンズは自然法に基づく人間の権利や自由主義経済を標榜した産業革命後の利益社会利益社会が抱える様々な問題を多くの小説、エッセイ、書簡、演説で批判的に論じている。しかし、自由競争で社会全体が繁栄するというアダム・スミスの『国富論』以来のレッセ・フェールに関しては、そうした楽観的なイデオロギーが生む社会問題に対して、ディケンズは具体的な解決策を見出してはいたわけではない。自分自身の帰属意識がヴィクトリア朝の経済を實質的に支えていた中産階級にあつたことから、彼は現存する社会システムをイエスの教えに従つて道徳的に改善するという、同様に楽観的な解決策を採らざるを得なかつたのである。こうした解決策には、地縁・血縁や友情で自然発生的に形成された中世の共同社会共同社会に共鳴した——ディケンズが『ハード・タイムズ』に献辞を載せ、『二都物語』ではフランス革命の資料提供を受けた——カールイルの強い影響が見られる。それはヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮を席卷していたダーウィニズムの相互闘争とは対照的な相互扶助の社会であり、家族的な絆が重視された前近代的な家内工業に見られるような父親的温情主義温情主義を基盤とした社会だと言える。とはいへ、実際、産業革命後の近代資本主義によって、新興ブルジョワジーに代表される中産階級は市民的自由や経済的自由を獲得できた一方で、封建的な拘束だけでなく人間相互の固い絆から

も解放され、今までに経験したことがない孤独感や無力感に晒されることになった。新フロイト派のエーリッヒ・フロムは、この自由獲得の代償として招いた孤独の結果、「近代人が自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めた」ことに注目し、〈自由からの逃走〉のために資本主義社会での禁欲的な経済活動に自分を専念させ、社会的強者への服従と弱者への攻撃という〈権威主義的パーソナリティ〉を作り上げたと述べている。

このような近代人の自由からの逃走を批判するために、ディケンズは『オリヴァー・トウイスト』で主人公による孤独からの逃走を描いているのではないだろうか。近代人にとって孤独が自由の代償であるのに対し、「父親が誰であるか、母親の住所も、名前も、身分も、皆目不明」(第二章)で、「教区の厄介になつている救貧院生まれの孤児」(第一章)であるオリヴァーは天涯孤独の身であるが、決して自由の身ではない。マン夫人の託児院でも、幼少時の救貧院でも、サワベリーの葬儀屋でも、鞭打ちと暗室監禁の罰を受け、自由の恩恵に浴することはない。だが、「どこへ行つても殴られたり蹴られたり、皆から蔑まれ、誰からも同情してもらえない子」として、生まれた時から暴力的な環境の中で生き抜いてきたオリヴァーにとつて、自分が受ける暴力は実のところ大した問題ではない。彼はさんざん暴力を受けてきた教区吏のバンブルに連れられて弟子入りのために葬儀屋へ行くが、別れに際して喜びではなく涙を見せる。「ソも淋しいんです (So lonely, sir)」(第四章)という彼の言葉から、その涙の原因が暴力以上に耐えがたい周囲から

の無視による孤独であることは明らかだ。葬儀屋で彼を意気消沈させた原因も、その場所の陰鬱な雰囲気ではなく、「世話をしあげたい友も面倒をみてくれる友もいなくて独りぼっち」（第五章）という環境にある。

そのような孤独からオリヴァーが逃走して向かった先のロンドンでは、一八二五年に一三五万の人口を擁する世界最大の都市になった反面、利益社会として人間関係が希薄になっていったという点で、皮肉にも同じ種類の孤独を彼に提供する可能性を持っている。とはいえ、その大都会の中心に、仲間意識の強い伝統的な共同社会として、フエイギン一味の巢窟が設定されていることの意味は大きい。フエイギンは子供好きで「愉快な老紳士」（第九章）と思われていたので（実は、スリのゲームにおける老紳士と同様に、その役を演じているにすぎないのだが）、オリヴァーは彼に尊敬の目を向ける。確かに、フエイギンと子供たちとの間には熟練工の社会的再生産のために存在した産業革命以前の徒弟制度のようなものが見られ、この親方が「わしら、お前を追い払うような、むごいことはせんぞ」（第二〇章）と言っているように、ここで弟子のオリヴァーが疎外感を味わうことはない。だが、フエイギンの前近代的な父親的温情主義（のように見えるもの）はオリヴァーの寂寥感を利用して「孤独と暗闇によって、こんな陰鬱な場所で独り悲しい思いをするより、どんな人間でもよいから仲間になりたいという気持ちにさせる」（第一八章）戦略に他ならない。フエイギンの「利己主義（number one）」（第四三章）を考えると、彼の盗賊団は

資本家が労働者に対して生殺与奪の権を握る新興産業都市の工場と同じであり、彼と子供たちの関係も基本的には労資関係と大差ない。オリヴァーの労働意欲をかき立てたのはプロテスタンティズムの倫理のような「厳しい道德観」（第一〇章）であり、フエイギンは朝の仕事に出かけるのが遅いドジャーとチャリーを叱りつけ、病み上がりのビル・サイクスに対してさえ「格安の（dirt cheap）」（第二九章）賃金で仕事をさせようとする。

また、このユダヤ人の盗賊団にサイクスが絶えず出入りするのは盗品故買をさせるためだけではない。単独で仕事ができるはずの狂暴な強盗でさえ孤独には耐えられないのだ。ナンシー殺害後に田舎へ逃亡したサイクスが、逮捕と死刑の恐怖にもかわらぬロンドンに再び戻ってきたのも、「もう一晚の孤独の恐怖」（第四八章）に威圧され、その恐怖から逃れるべく仲間たちを求めた結果である。彼は愛人のナンシーや飼犬のブルザイ（Bullseye）に暴力をいつも振るっているが、むしろ、その特徴は他者の苦痛に快楽を見出すサディズムである。しかし、他者からの孤立に耐えられないサディストは、従属してくれるマゾヒストがいなければ、その存在意義を失ってしまう。

逆もまた然り。オリヴァーに見せた「臍筋や腕の青黒いあざ」（第二〇章）が無言で語るように、ナンシーはサイクスから日常的にDVを受けているが、彼の暴力に我慢している彼女の被虐性の愛も、耐えがたい孤独から何としても逃げなければならぬという強迫観念の産物である。このような被虐的な依存を示す典型例として、サイクスから褒められた「ナンシーがとて

も嬉しそうな様子で真心を込めて挨拶を返す」場面がある。そうしたマゾヒズムを彼女は女性特有の「愛」として合理化し、清純な乙女のローズに対して「私みたいな女がどこかの男に腐った心を託してしまい、みじめな生活をしている間に空っぽブランクになってしまった場所に居座られたら最後、もう誰も救えませんが……女としての気持ちは一つしか残ってないし、ひどい罰を喰らって、それが慰めや誇りなんかじゃなく、新たに暴力と苦痛ばちを受ける手段にされてしまったことを哀れんでください」（第四〇章）と言っている。⁵心が「空っぽ」という喪失感が癒やされ、そこに自分のレゾンデートルを見出せるのであれば、たとえ被虐性の愛であっても、それはナンシーにとって命よりも重要になるのだ。この点からも、他者への自発的服従によって自分の苦痛に快楽を見出すマゾヒズムは、無力感を伴う孤独からの逃走と他者への完全なる依存という点で、サディズムと同断であることが分かる。ナンシーは「どんな苦痛や虐待を受けても、あたいはあいつの所へ引き戻され、あいつの手にかかって最後に死ぬと分かっても、どうしてもそうやってしまおうんです」と語っている（図版①）。そのような被虐性の愛は理性の制御に収まらないパトス、換言すれば、ローズの常識が捉えた「狂気」としてしか定義できない。このような狂気の愛は四五歳のディケンズが十八歳のエレン・ターナンと関係した一八五七年以降の小説、特に学校教師ヘッドストーンと聖歌隊長ジャスパールが求めてやまない三角関係の中での倒錯した愛を通して、より深層まで掘り下げられることになる。



図版①「ナンシーとサイクス」（第39章、ジェイムズ・マホニーの挿絵、ハウスホルド版）

ナンシーはサイクスを裏切ってローズの所へ行く前に彼の唇にキスをする。

第二節 追跡の快楽

救貧院の子供たちは「空腹のあまり暴力的になる」(第二章)

——オリヴァーは「空腹のあまり自暴自棄になって」お粥をもつと欲しがるという罪を犯す——のに対し、救貧院委員会の紳士たちは満腹後の娯楽として暴力的な考えを思いつき、オリヴァーを罰すべく商船に乗せようとする。それは「船長が食後の気晴らしに彼を鞭で殴り殺すか、鉄棒で彼の頭をたたき割る見込みがかなり強く」(第四章、そうなれば委員会は自ら罪悪感を抱くことなく厄介な少年を処分できるからである。こうした娯楽や気晴らしは、船長にせよ委員会の紳士たちにせよ、彼らが労働者階級特有の属性として忌避する野蛮な暴力を基盤にしている。委員会で発言力を持つ白チョッキの紳士が、罪深いオリヴァーの刑には絞首のみならず、すでに摂政時代に廃止された「内臓えぐりと四つ裂き」(第三章)も加えられるに違いないと断言した場面からも、当時の紳士階級の大半は前時代の残忍性から決して脱していなかったことが読み取れるだろう。

こうした支配階級の娯楽や気晴らしは生来の暴力的な本能に対する抑圧から生じたストレスの解消にすぎない。勇壮かつ華麗な伝統的スポーツとしてのキツネ狩りができる貴族や大地主と違い、それができない支配階級は被支配階級の人間を駆り立てることで加虐的衝動を満たそうとする。階級という点で注目値するのは、中産階級のブラウンロー氏がスリと間違えたオ

リヴァーを追跡する時に、真の犯人であるドジャーとチャーリーも群衆に紛れて追跡に加わっていることである。下層階級の労働者だけでなく犯罪者についても、いわゆる〈追跡の快楽〉をディケンズは抑圧された暴力的な衝動の昇華として描いている。ここでは、ドジャーとチャリーによる追跡が「忠実なるイングランド人の一番重要な最高の誇りである臣民の自由(フリイズム)人の自由(リバティ) (第一二章)として正当化されている点に注意したい。彼らの「我が身の保護と安全への関心」は「自然の女神のあらゆる言動の推進力として定められた、ささやかな法規」に従ったものだが、それは言うまでもなくベンサムに代表される「深奥にして健全なる判断力に富む学者たち」の功利主義が「人間の心情や慈悲心を無視している」ことに対する皮肉である。

しかしながら、ベンサムの快楽主義を利己主義と同一視してはならない。彼が列挙した快楽の中には、他人の幸福を感じる慈愛の快楽も、他人の苦痛を見て感じる悪意の快楽——スクルージにとっては「学者たちが言うところの快楽 (nuts)」(第一章)、要するに毀傷(シャイデンフロイデ)も含まれるからである。こうした快楽主義が「最後に到達する目的さえ正しければ、どんな手段を採ってもよい」(第二章)というマキャベリズムに支えられていることを見抜いたのはディケンズの慧眼である。快楽主義を社会の原理として提唱したベンサムの功利主義に潜む暴力性が、オリヴァー追跡の場面を通して、自由という美名に隠れた暴力性として暗示されていることは間違いない。そのような自由には、ディケンズが『アメリカ紀行』で「自分たち

と同じ人間を虐げ、野蠻で、無慈悲で、残酷になる自由^{フリーダム}」（第一七章）として批判した（逃亡奴隷の追跡に懸賞金を出す）奴隷制度支持者たちの〈人身の自由〉を認めない自由のように、外的な強制や拘束を受けずに自己の意志や欲望に従い、同じ強制や拘束を他者に加えるという自家撞着が見え隠れしている。

読者は、本来であれば真の犯人として追跡されるべきドジャーとチャーリーが通行人を欺き、善良な市民を装って偽の犯人オリヴァーを追跡したことに、自己の罪を弱い立場の他者に投影して外的なものとして認知している、その心理的な働きを嗅ぎ取る必要がある。彼らが群衆と一緒に楽しんでおろくろく追跡劇（図版②）は、ちょうど馬鹿騒ぎの中で狼藉を働いた責任を藁人形に転嫁して最後に火刑に処した昔のカーニヴァールのように、自分たちの犯罪行為が不問に付されるだけでなく、日頃の抑圧された暴力的な衝動を解放する恰好の憂さ晴らしの場となっているのだ。娯楽としての牛イジメ（bull-baiting）や「熊イジメ（badger-drawing）」（第三章）は、観客が自分の臆病さを意識せずに済むように、自分を猛犬と同一視して楽しむ集団的なイジメだと言える。ここで問題となるのは集団的なイジメの対象が猛獣ではなく、人間（しかもオリヴァーのような幼い子供）になっている点だ。集団でオリヴァーを追跡する際の「泥棒だ、追いかける！（Stop thief）」という叫び声にはディケンズが看取したような「魔法の力」（第一〇章）がある。ディケンズは「何かを追跡したい」という激しい感情が人間の心の奥底に根づいている」（強調は作者）ことを指摘し



図版②「泥棒だ、追いかける！」

（第10章、ジェイムズ・マホニーの挿絵、ハウスホールド版）

ているが、それは農耕が開始された新石器時代以前の狩猟採集社会の加虐的な追跡の本能の残滓とも言うべきものであろう。ここでは、野外スポーツや害獣退治なる美名のもとに正当化されるキツネ狩りという紳士階級の集団による弱い者イジメが、その舞台を労働者階級へ移すことで、同じような暴力的衝動に後押しされ、「泥棒だ、追いかける！」という追跡の快楽を伴うサディスティックな娯楽へと変換されているのではないだろうか。

追跡の快楽を高める視覚の原理として特に重要なのは、自分の姿が見られることなく、独占的に見る事ができるという地の利である。フーコーが近代社会の主体と権力の構造に通底していることを明らかにするために援用したベンサムの一瞥監視施設^{パノプティコン}という牢獄の監視システムについて敷衍するならば、監視する側が自分の姿の不透明性による安心感から視線の快楽を味わえるのに対し、監視される側は見えざる監視の絶え間ない存在によって不安に陥る。フエイギンの盗賊団もそうした権力構造を持つ近代社会のマイクロリズムになっており、彼が強要する相互のスパイ活動によって、構成員は常に監視される不安に怯えている。「自分の秘密を盗もうとする見えざる視線」(Miller 50)の恐怖に晒されることは、大小を問わず犯罪組織集団の構成員すべての宿命なのである。

快楽と結びついた監視の問題で特記に値するのは、監視者がすべて臆病者として特徴づけられている点である。「どっかの一味の親分になって、みんなを鞭で打ったり、気づかれずに

追跡したい」(第四章)という願望を持つノア・クレイポールは、葬儀屋の先輩として始終暴力を振るっていたオリヴァーから逆に床の上に殴り倒されたとき、「弱い者イジメの臆病者(cowardly tormentor)」(第六章)という実像を暴かれる(本稿の扉絵参照)。ナンシーの尾行をノアに依頼したフエイギンも、自分に累が及ばないように金を与えて部下に仕事をさせる点から判断して、その実体は臆病者である。また、モンクスは異母兄弟のオリヴァーを「追い詰め、休ませず、追跡する」(第五章)と母親に誓っていたが、殺すと我が身も危なくなるので、弟をフエイギンの所に留めて監視しておきたいという臆病な願望しか持てない。こうした監視する側の臆病さは、モンクスがフエイギン一味の隠れ家である居酒屋の奥にある小部屋で見張っているナンシーの影に怯えているように、見られずに見るといふパノプティコンの地の利が逆転した時に判然と見える(第二十六章)。夜盗に失敗したサイクスたちを追跡するとき、メイリー家の召使たちに加えて、同宿していた鍔掛け屋と二匹の犬までが犯人追跡をやめて退散するのも、夜闇の中では監視の地の利がないどころか、照明を持つ側が反対に監視されるという状況の逆転によって臆病風に吹かれたからだ(第二十八章)。このように権力側の実体を可視化するための〈逆様の世界〉は、ダイケンズが全作品で戦略的に使用している真実暴露の装置であり、近代社会を支える中産階級の事大主義や自己欺瞞といった共通の罪を暗示する『リトル・ドリット』の原題「誰の責任でもない(Nobody's Fault)」は、その最大の成功例である。

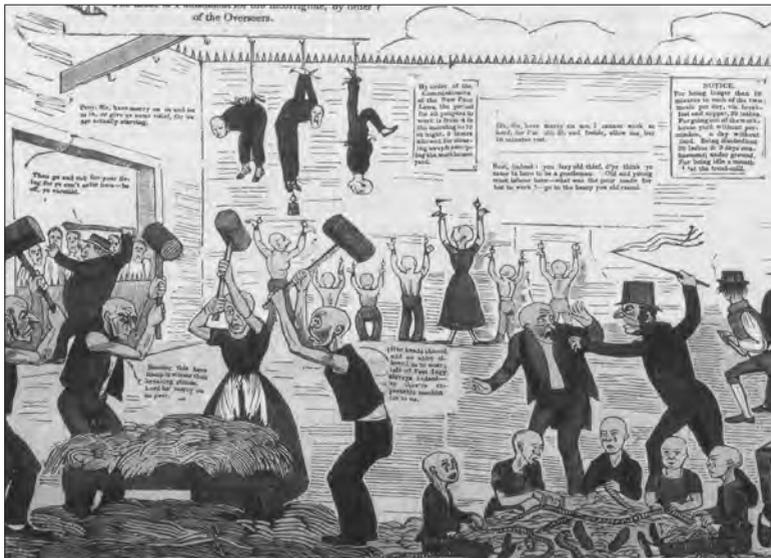
第三節 恣意的な暴力としての法

『オリヴァー・トゥイスト』の最初の七章は一八三四年制定の救貧法改正法（新救貧法）に対する作者の痛烈な批判書である。労働能力のある貧民の院外扶助アウトドールリリーフを認め、一七八二年のギルバート法、そして低所得者や失業者への賃金補助と貧民への最低生活を保障した九五年のスピーナムランド制度のせいで、一六〇一年以来のオリザベス救貧法（旧救貧法）は、十九世紀になると政府に過重な財政負担をかけるようになっていた。この旧救貧法は貧民を地方の教区に留まらせ、安い労働力として産業都市へ流出するのを防いでいた点で、特に産業資本家にとっては腹立たしい法律であった。また、レッセ・フェールを抛り所として立身出世した新興ブルジョワジーにとって、富裕は勤勉という美德の結果、貧困は怠惰という悪徳の結果であり、英国民の伝統とも言うべきピューリタンの自助の精神に欠ける貧者の窮状は、すべて自己責任として放置すべきものであった。『オリヴァー・トゥイスト』の中で、救貧院は「貧困階級にとつて完全なる公共の娯楽場」、「無為徒食の極楽浄土エクリンセント」（第二章）に他ならないという皮肉を救貧院委員会に言わせた理由は、そうしたエートスに求めることができる。ゆえに、自由主義的な諸改革を支持していたブルジョワジーが、一八三三年の工場法に反対したのは当然だ。そして、その流れとして翌年に成立したのが、ベンサム主義者チャドウィックの起草した王立

委員会の調査報告書に基づいて作成された新救貧法である。

新しい救貧院は貧民が怠惰に流れないための抑止力として設立されたものであり、「バステイーユ監獄」という別名からも分かるように、窮乏と不正と暴力が支配する施設であった。特筆すべきは、設立当時の救貧院には老人、病人、孤児、捨て子、そして私生児も区別されず一緒に収容されていたことだ。しかし、労働能力のある収容者は、オリヴァーのような子供といえども、怠惰と悪徳を追い払うような労働に従事させられた。その労働とは「まいはだ作り (picking oakum)」（第二章）のように下等なもので、食事は貧弱そのもの——オリヴァーがブラウンロー氏の家で飲んだ茶碗一杯の肉スープは「三五〇人の貧民にも余るほど十分な食事」（第二章）——であった。貧窮した生活にもかかわらず自分の埋葬費用を服に縫い込んだ『互いの友』の老婆ベティ・ヒグデンに、ディケンズが最後まで「そこに収容するくらいなら殺してくれ」（第一巻第一章）と言い続けさせた背後には、救貧院が「食事の点でも、住居の点的な施設」（第三巻第八章）だったという事実がある。当時の救貧院の暴力性を描いたポスター（図版③）を見るかぎり、こうしたディケンズの描写に過度な誇張があったとは思えない。

批判の俎上に載せられるのは新救貧法だけではない。ヴィクトリア朝でイギリス法の根幹をなしていたのは、社会の変化に即した合理的な解決が得られないとベンサムに批判されたコン・ローである。世俗的権力の上に神の法を置いたキリスト教



図版③ 新救貧法がイングランド北部で最初に導入された1837年の反対運動のポスター(制作者不詳)。

は、厳格な家父長制の律法社会で形成されたユダヤ教を母体にして発達した。従って、ヴィクトリア朝の夫婦のジェンダー・ロールにも、イングランド教会の結婚式で妻が祈祷書の言葉に沿って夫に対する従属と奉仕を誓わせられるように、主君と家臣の主従関係が色濃く投影されている。こうしたコモン・ローの規定によって、独立した財産権を持つ女性性は結婚すると法的に夫の保護下に置かれた婦人 (*feme covert*) となり、妻の財産はすべて夫の所有となった (*Paroisien, OT 222*)。後家のコーニー夫人が危篤のサリー婆さんの所へ行つた場面(第二章)で、銀のスプーンを数えたり家具の価値みをするバンブルの嬉々とした態度が少しも不可解に思えない、所以である。

財産目当てで未亡人と結婚したバンブルは、二ヶ月もしないうちに現実の夫婦関係が祈祷書の言葉を反映していないことに気づく。気づいているからこそ、「男の特権は命令すること」、「女の特権は男の命令に従うこと」(第三章七章)だと主張せざるを得ないのだ。バンブルは妻の涙について「弱さの証拠」という伝統に即した解釈しかできず、ワニが相手を喰らいながら流す「さら涙 (*crocodile tears*) 」という伝説を知らないため、「支配権を求めて一撃を喰らわす」妻によってヘゲモニーを簡単に奪取されてしまう。そのような逆様の世界を構築したディケンズの目的は何かと言えば、バンブルは「弱者イジメが大好きで、ちょっとした残虐行為をして途方もなく楽しんでいたので、(言うまでもなく)臆病者だった」という一文で分かるように、それはコモン・ローを基盤とする伝統的な家父長制社

会で権威を振りまわす尊大で愚鈍な小役人 (Bumbleton) の実像と虚像の違いを明るみに出すことであろう。

ところで、当時のコモン・ローは結婚した女性が法的に有効な契約をすることを許しておらず、夫の同意がなければ遺書も作成できなかった。しかし、訴訟を起こすことができない代わりに、既婚女性は訴訟を起こされる心配もなかった。例えば、モンクスとの悪事が露見してバンブルがすべてを妻のせいにする、ブラウンロー氏は「法の目から見れば、君の方が罪は重い。法は妻が君の指示で行動したと考えるからだ」(第五一章)と断言する。ここで看過してならないのは「法は馬鹿者 (fool) —— バカヤロー (fool) だ。それが法の目ってんなら、法は独身野郎だ。経験を積んで、目を開かれりゃいいんだ—— 経験でな」というバンブルの捨て台詞である。コモン・ローとはそもそも新救貧法のように議会通过した成文法ではなく、慣例や判事の裁定に基づいた判例法であり、その基本は論理ではなく経験にある。従って、バンブルのバカヤロー発言は、判例の積み重ねによって形成されたコモン・ローが基盤とする常識の問題点、特に両手に秤と剣を持って目隠しをしている女神で表象される正義と公平の欠如を期せずして暴き出す。裏切り者の少年を絞首台に送るべく検察側の証人として偽証の経験があるフエイギンから脅されたオリヴァーは、「無実の人間と罪を犯した人間とがたまたま一緒になったとき、裁判官自身ですら両者を混同する場合がある」(第一八章)ことを経験によって知っている。窃盗容疑で逮捕されたオリヴァーを裁くフアング判事

が、こうした裁判官のパロディーであることは言を俟たない。

当時のコモン・ローは法的に結婚していない両親から生まれ、オリヴァーを「非嫡出子 (illegitimate)」(第五二章)とした。一七三三年の旧救貧法の規定によれば、非嫡出子の扶養義務は父親にあり、父親が扶養しなければ、母親は彼を逮捕・監禁させることができた。一方、功利主義者や福音主義者の考えによれば、旧救貧法のもとで母親が父親を特定して払わせた養育費は、非嫡出子の増加に歯止めをかけるどころか、マルサスが警告した人口爆発に油を注ぐだけであった。また、旧救貧法は貧民の怠惰を助長して私生児を増やし、私生児を抱えた母親の救済は教区の財政を圧迫するばかりか、女性の道徳観に悪影響を与えるという考えが支配的であった。カーライルは『チャーテイズム』(一八三九年)の第三章「新救貧法」で「散財、怠惰、庶子作り (Bastardy)、飲酒に対する奨励金となった法律は廃止すべきである」と述べている。そうした認識のもと、新救貧法の私生児条項の起草者たちは庶子問題の責任を母親だけに負わせ、それで婚外の子供が減ると考えたのである。また、私生児は母親から道徳観の欠如を受け継いでいるから、嫡出の孤児に悪影響を与えるという理由で—— 孤児の大多数は非嫡出だったにもかかわらず—— 当時は孤児院への收容を拒まれていた。¹¹ 私生児を罪悪視する社会風潮は、ローズがハリーの求愛を固辞する時の「私の名前には消すことのできない汚点があり、世間では何の罪もない子供の上に、この汚点がつけられることがあります」(第三三章)という言葉に端的に現れている。オリヴァー

アーの母親の妹であるローズは乳児の時に運よくメイリー夫人の養子になることができたが、運が悪ければナンシーのような売春婦に墮し、浮浪罪で逮捕されたかもしれないのである。

この浮浪罪の問題に関しては、一五三四年に国王至上法を發布したヘンリー八世による修道院の解体で浮浪者が急増して以来、その数がイングランドで減ることはなかった。産業革命以降はその負の遺産としての貧困によって浮浪者がロンドンの街にあふれていた。その対策として一八二四年に「浮浪罪法 (Vagrancy Act)」が制定されたが、これは為政者たちにとって目障りだった売春婦、乞食、ジプシーなどを恣意的に逮捕できた暴力的な法律である。この浮浪罪法に対するディケンズの諷刺が『オリヴァー・トウイスト』には散見される。葬儀屋に弟子入りしたオリヴァーがスラム街で見たものは飢死した女の亡骸であったが、その死因は夫が病気の女房のために物乞いをしたかどで投獄されて彼女を放置したことにある。「奴らが俺の女房を飢え死にさせたんだ」(第五章)という夫の怒りは、法という暴力的な正義のもとで支配階級が社会的弱者に対して間接的に行った殺人への雄弁な告発となっている。また、干し草の中で寝ていて現行犯で逮捕・留置された浮浪者たちを、ロンドン警察の刑事たちが見に行く場面がある。「これは重罪だが、処分は投獄だけで済み、国王陛下の臣民全体に漏れなく愛を示すというイングランド法の慈悲深い目で見れば、寝ていただけの人間に対して暴力的な夜盗を働いたので死刑に処すべきだと断じるには、証拠が不十分だと思われた」(第三一

章)というディケンズの皮肉からは、社会秩序の維持という浮浪罪法の建前の背後で囁かれる為政者たちの本音が聞こえてくる。「暴力批判論」で法や正義といった領域で振るわれる暴力の倫理性を問うたベンヤミンは、近代国家の警察が「法的目的のため(処分権をもつ)暴力」を体現しただけでなく、「法的目的をみずから設定する権限(命令権)」を持つてもいたと論じている¹²。暴力は恣意的に行使できる——法定範囲を超えた暴力であっても、それ自体が新たな法を形成する——というのが、為政者たちの本音であったことは想像にかたくない¹³。

第四節 正義に内在する暴力性

オリヴァーが窃盗容疑で逮捕された時も、メイリー家の夜盗事件で瀕死の重傷を負った時も、この私生児を信じて同情する正義の味方、ブラウンロー氏は「慈悲深い普通の老紳士の六人分ぐらいの大きな心」(第二章)を持った男という印象を読者に与える。しかし、ファンゴ判事に怒りを爆発させた場面で判然とするように、この老紳士は「多少かつとしやすい性分」(第一四章)の男でもある。では、「根はいい人間だが、いささか態度が荒っぽい……何でも相手の言い分に逆らいたい性分の男」グリムウィッグ氏が、彼の無二の親友として設定されたのは何故だろうか。多少の欠点によって人間味が増すのは事実であるが、私たちは「類は友を呼ぶ」という諺を想起するまでもなく、イデオロギーや価値観が共有される同一集団では自己正

当化が容易になる点で、彼らの正義感に一抹の疑念を抱かずにおれない。彼らの欠点は、中産階級に特有なりスペクタビリティに内在する欺瞞性、言い換えれば、外面と内面の乖離——前面に押し出される真・善・美と裏面に抑圧される暴力と結びついた偽・悪・醜の併存——を示唆しているのではあるまいか。

『オリヴァー・トゥイスト』に登場する紳士たちは、ほとんど例外なく、この種の暴力性を秘めている。怪我をしたオリヴァーの治療をするメイリー家の親友・ロズバーン医師も、「親切で愛情深い……風変わりな」(第四章)所があり、その奇行は彼の「せつかちな気性(impetuosity)」を通して繰り返される。また、ローズへの愛から政治家をやめて田舎牧師になるハリーにさえ、ブラウンロー氏と共通する旧約聖書の同害復讐法を超えた暴力性が見出せる。サイクスによるナンシー殺しに際して、「殺された哀れな女の復讐をしたくて血が煮えたぎっている」(第九章)ブラウンロー氏は、警察の百ポンドの賞金に五〇ポンドを追加するが、それ以上に興味深いのは、この話を聞いたハリーが馬に飛び乗り、「追跡と逃走」と題された次の第五〇章で、「この世で最も恐ろしい叫びを上げる怒りに燃えた群衆」の先頭に立っていることだ。この場面では、群衆の中でも「特に甲高い声」を上げながら二〇ギニーの報奨金を追加した男の名前が巧妙に隠されているが、「馬に乗った男」という表現で読者にはハリーだと即座に分かる。愛情深いメイリー夫人の独り息子として、純真無垢なローズの恋人として、愛のために名声も富も捨てる若い紳士として、そして何よりも

主人公オリヴァーの親友として、ハリーは一貫して真・善・美の世界の代表者として描写される。だからこそ、彼が時おり見せる暴力的言動に、私たちは警察による正義の暴力とは別の種類の否定的な属性を読み取りたくなるのである。

法律で貧困者や浮浪者を取り締まって監禁しようとする支配者側の心理に、自分たちの依拠している社会秩序を乱すものへの恐怖心があることは間違いない。しかし、犯罪者を追跡するブラウンロー氏にせよハリーにせよ、暴力的な犯罪に対する恐怖や嫌悪とは裏腹に、そうした暴力に魅了される心理があることも否定できないだろう。このような紳士たちは、中産階級に求められるリスペクタビリティによって日頃から暴力的な本能を抑圧しているからこそ、時として警察や群衆と一体化することで、そうした欲望を解放していると考えられる。しかしながら、彼らの暴力はいわゆる公務執行型の暴力として正当化されてしまう。ブラウンロー氏は脱法行為を繰り返す似非紳士のモンクスに対し、「逃げ出すのはお前の自由、追跡するのはわたらの自由……おまえは保護を求めて法にすがすがよい、わしも法に訴えるから」(第九章)と言っているが、そうした勝算の抛り所はどこにあるのだろうか。それが法と正義は自分たちによって構築されているのだという確信にあるとすれば、私たちはブラウンロー氏の確信に空虚さしか感じない。なぜなら、彼はオリヴァーを虐待したモンクスを気の毒に思い、この兄が「昔の非行を改めて正直な仕事に従事できる」(第三章)ように、弟に残っていた遺産の半分を相続させるが、その後も兄が

罪業を重ねて獄中死したことで、読者の心にはブラウンロー氏の洞察力のなさだけが残ってしまうからである。

『オリヴァー・トゥイスト』では、正義に内在する暴力性のような否定的属性は人間だけでなく、多くの人間が住む都会に閉しても見られる。田舎を脱出してきたノア・クレイポールとシャーロットが到着した場所は犯罪地区サフロン・ヒルにある居酒屋だが、ここは「ロンドンの中心にありながら改善されずに取り残された最も最悪の地区」（第四二章）である。犯罪者にとつて一番安全な場所である悪の巣窟が蒙啓されたはずの文化都市の中心にあるという考えは、帝都ロンドンの中心に「闇の奥」としてアヘン窟が描かれる『エドウィン・ドルードの謎』に至るまで、ディケンズの全作品を通して反復されるトポスである。このトポスは、物事にはすべて功罪があつて表裏一体になつていくというディケンズの信念——産業革命後の華やかな都市の人工的な光と、その反動として生じた都市スラムの人工的な闇とが交錯した社会に住む作家の信念——を反映している。その信念は、自由を謳歌する共和国の首都ワシントンの街中で鎖につながれた奴隷が売買される場面など、醜混在という数多くの現実、ディケンズが失望したアメリカ訪問によつて強化され、中期以降の作品で二項対立が崩壊・混在したイメージや象徴を通して鮮明な形で表現されるようになる。

それでは、都会と対蹠的に設定された田舎についてはどうだろうか。メイリー家の女性たちがオリヴァーを連れてロンドンから脱出した先の田舎は、彼女たちが中産階級の紳士たちに見

られた暴力性とは無縁の存在であるため、女神のイメージを共通項として自然や正義を連想させずにおかない。確かに、『デイヴィッド・コパフィールド』で主人公が休暇を過ごす田舎の港町ヤーマスなどと比較すると、H・P・サックスミスが指摘するように、『オリヴァー・トゥイスト』の田舎は抽象的に語られるだけで、ある種の情緒を喚起する〈客観的相関物〉が具体的に示されることはない（Sucksminh 278-84）。しかし、美しい自然に囲まれた田舎へのオリヴァーの移動には、ディケンズの小説に一貫して見られるように、子供時代という過去への回帰と同時に、現在の過酷な現実を超えた未来への橋渡しの意味合いがあることも確かである。「平和な田舎の風景が呼び起こすものは、この世に関する記憶でも、この世について思ったことや望んだことの記憶でもない」（第三二章）と語るディケンズは、現世の深い溝を超えて子供時代の楽園と来世の天国を結びつけるために、田舎の自然を利用しているのである。¹⁴

このように田舎や自然は一見すると肯定的に描かれているように思えるが、実際には真・善・美だけからなる空間ではない。ロマン主義が不正のはびこる既存の社会システムから逃避した自然の豊かな田舎は正義の支配する平和な空間に見えるが、読者は田舎に潜在している暴力的なものにも気づかねばならない。ローズは困窮した田舎の村人たちを助けている最中に病気に感染して「危険な高熱」（第三三章）の餌食となり、農民の母の「葬式の鐘の音」が彼女を死にいざなうように聞こえてくる。¹⁵ ロズバーン医師が「罪悪は死と同じで、生気を失った老人

だけに限られるわけでなく、どんなに若くて美しい人間でも、その餌食として選ばれることが少なくない」(第三〇章)と語っているように、牧歌的な空間といえども人間同様に暴力的な罪悪に蝕まれているのである。¹⁶その証拠に、怪我の療養のために田舎へ移ったオリヴァーは、自然の美しさに癒やされると同時に、都会から追ってきた悪人のフェイギンとモンクスによる拉致監禁の危機に瀕している(図版④)。

居眠りをするオリヴァーの姿を窓の外から確認する二人の存在は紛れもなく現実であるが、ディケンズは「時おり私たちに忍び寄る睡眠で、身体はそれに囚われながらも、精神は周囲のものに対する知覚から自由になれない睡眠」(第三四章)、すなわちアセリンスキーとクライトマンが一九五三年に明らかにした〈ヘレム睡眠〉の存在に百年以上も前に気づいていたようだ。この時のオリヴァーの半醒半睡の状態、つまり「現実と想像が奇妙に混在し、あとで二つを分けることがほとんど不可能になってしまふ」状態は、覚醒している時と同一の自我によって体験される幻覚のように現実性を備えた装置として利用されている。しかし、ディケンズは同時に、そうした夢現の状態によって、オリヴァーが今現在いる田舎もまた光闇、美醜、真偽、正邪、愛憎、善悪、そして正義と不正の混在した空間であることを暗示しているように思えてならない。そのような混在は『ドンビー父子』以降の作品で様々なイメージや象徴(例えば、鉄道、海、霧、火、影、時計、葡萄酒、手、河、ゴミの山など)を通して作品のテーマと構成の統一性に寄与することになる。



図版④「モンクスとユダヤ人」(第34章、クルックシャンクの挿絵)

田舎の別荘で居眠りをするオリヴァーが都会から追いかけてきた悪人たちに監視されている。

注

1 Erich Fromm, foreword, *Escape from Freedom* (1941; New York: Henry Holt, 1994) x.

2 オリヴァーは蒲柳の質に見えるが、それは栄養失調のせいであり、実際は打たれ強い子供として設定され、暴力にあふれた小説で悪の諸相を際立たせる触媒の役割しか与えられていない。そのためか、彼はデイヴィッドやピップのような興行きの深さに欠ける平坦な登場人物、Q・D・リーヴィスの言葉を借りれば、「無害で個性のない意識」(Teavis 153) という印象を与える。お粥を要求する場面であれ、ノアに暴力を振るう場面であれ、彼に欲望の抑圧が見られないのは、無垢による正義を体現させられているからに他ならない。主人公が欲望と抑圧の葛藤で変化するのは、J・キューシツチの指摘にあるように (Kueich, *Repression* 214)、「未熟な心による軽はずみな過ち」(第四五章)で苦悩するデイヴィッド以降である。

3 オリヴァーの服と所持品を取り上げて必需品を配給し、飴と鞭で「洗脳」するフエイギンの方法に、B・プロディは共産主義の本質を見出している (Brody 61-66)。

4 サイクスがナンシーを殺害した時点から、確かに彼は読者の共感を呼ぶ人物になる (Collins, *Crime* 263)。ディケンズが殺害後もサイクスを「泥棒」と表記している——実際、追跡後は一貫して「殺人者」になるのだが——点に注目し、彼の行為と性格との「突然の不連続」(Rodensky 78)に読者の共感の原因を見出す批評家もい

るが、すでにオリヴァーの安全が保証されたことや、ディケンズの関心が殺人を犯した男の心理に移ったことが原因で、私たちの視点も殺人者を追跡する暴力集団の群衆から孤独と恐怖に苛まれる個人へ移ってしまうと考えるべきではなからうか。

5 サイクスの暴力に暴力で対応する飼い犬のブルザイと違い、無抵抗に受け容れるナンシーに関して、L・サリッジはその忠誠心の中に当時の新興中産階級が労働者階級に課そうとしていた「無私無欲の女性性という理想」(Surrage, *BH* 37)を読み取っている。

6 証拠品を始末した後も「何か影を見るたびにドキッとする」(第三八章)臆病者のモンクスは、バンブル夫妻と別れたあと「孤独になることに抗いがたい嫌悪感」を抱き、「どこか下に隠れていた少年」を呼んで一緒に立ち去っている。この意味深長な場面に注目したJ・タンプリングは、チャーリー・ヘクサムに対するヘッドストーンやエドウィン・ドルードに対するジャスパールを通して暗示される鶏姦ペドラーの可能性を指摘している (Tambling, *Dickens* 166)。これもまた孤独からの逃走による暴力の変奏の一つだと言え。

7 Sally Mitchell, ed., *Victorian Britain* (New York: Garland, 1988) 872.

8 R・リチャードソンは選挙法改正法に隠れて従来ほとんど言及されることがなかった一八三三年の解剖法 (Anatomy Act) に着目し、この法律が古き良き時代のパターンリズムを解体させ、貧民を階級として分類する二年後の新救貧法への政治的布石になっただけでなく、選挙法改正法や新救貧法と共に社会を貧富という二つの国民に分断するくさびになったと評している。この評言は『互いの

友』における身体／社会の断片化という問題に重要な示唆を与えてくれ。Ruth Richardson, *Death, Dissection and the Destitute* (Harmondsworth: Penguin, 1988) 266-67.

9 オリヴァーに嘘つきと言われてサワベリー夫人が流した「洪水のような涙」(第七章)の目的は「夫を操縦すること」(Tromp)だという指摘は、彼女が家父長制の男性性に欠ける夫の劣等感を「そら涙」によって利用しながら支配権を握っている点では正鵠を射ている。ただし、ノアとオリヴァーの階層関係が暴力を通して逆転したことを知り、彼女が夫婦関係におけるジェンダー・ロールの再逆転の危険性を察知していることも「そら涙」の因である。

10 コモン・ローの欠陥と不備を道徳律に従って補正した衡平法(チェイティ)はベンサムによって科学的合理性に欠けると批判された。大法官府(チェイティ)(衡平法裁判所)なる大きな権限を持つ官僚組織に見られる不合理性については、K・ドリンの『荒涼館』論(Dolin 71-96)に詳しく。

11 Ivy Pinchbeck and Margaret Hewitt, *Children in English Society*, vol. 2 (London: Routledge, 1969) 587.

12 ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』(野村修編訳、岩波文庫、一九九四年)四三〜四五頁。

13 ロンドンの刑事たちを信用していないロスバーン医師やブラウンロー氏は警察に代わってモンクスを取り締まるが、D・A・ミラーは中産階級の彼らが法や警察の権力を内面化している点に着眼し、「法とそれに代わる彼らとの表面的な分割線は裏面での合同関係を示す」を主張している。D. A. Miller, *The Novel and the Police* (Berkeley: U of California P, 1988) 7.

14 シュワルツバッハは都会の危険性を「こうした子供時代の牧歌的な楽園と結びついた過去からの離別」(Schwarzbach 60)と結びつけて論じている。

15 この場面には一年前に義妹メアリ・ホガースを急襲した暴力としての死に対するディケンズの複雑な思いがある。(Slater 93-95)。

16 エドマンド・バークにとつて崇高と美は対立するものだが、ディケンズは崇高なるものが田舎の自然に固有の恐ろしい危険に依存していることを理解していた。例えば『互いの友』で、ヘッドストーンがレイバーンを襲撃したのは、「空が大地を出迎えている刃りまで……人が無限に広がる風景の美を追いかける」(第四卷第六章)村——リジーが彼の安全のためにロンドンを離れた先の村——である。田舎には人間の目に触れない不可解な恐ろしいものが伏在している。そうした田舎の神秘や恐怖は過去のメタファーとして存在しており、現在の理性的な凝視に晒されることによって解明される。コナン・ドイルは一八九二年の「ブナ屋敷」でイングランドの田舎を不気味なものとして提示している。ワトソン博士に対するホームズの説明によれば、「ロンドンのいかに下劣で不道徳な路地といえども、晴れやかで美しい田園よりも恐ろしい犯罪歴を提示することはない」のだ。ホームズが田舎を暴力の隠蔽された陰悪な世界と見なす理由は、法律の手が及ばないところを住民の世論が補ってくれる都会と違い、法律を知らない人々が住んでいる田舎は警察組織の監視システム——ホームズ自身が体現しているパノプティコン型の監視システム——の埒外にあるので、「残虐非道な行為や不可解な悪事が毎年のように起こっても誰も気づかなさ」(Conan 66)。